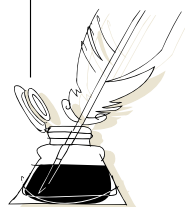


人生讃歌

新・愛酒日記



多くの酒嗜好は先祖の血統である。だからいくら飲んでもいいと思っているわけではない。なぜなら、多くの父の父親つまり我が祖父は福島県喜多方での村人の葬儀で飲んだ酒で酔っぱらい、帰る途中に川へ落ちて三十四歳で死んでいるからである。ま、孫のぼくは酒に酔って死ななくてよかった、とは思ふ。ただし、これまでのところは、である。

【某月某日】

長野の上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の館主で作家の窪島誠一郎と飲み「世界底者協議会」を結成。理由は、俺たちは世渡り下手なため実力以下に見られて不運である。この状態は常に海底に沈んでいる平目や鰈の底者に似ている。抗議のため結成するとして乾杯した。会長がぼく、副会長が窪島の二人のみで会員なし。窪島誠一郎は作家、水上勉の息子に生まれたが別の親に育てられ、あるとき水上勉が実父と知って驚愕。その父に会えたのが三十歳過ぎ。その窪島の強靱な精神力に乾杯。お互い底者の底力を見せてやろうと乾杯し続けて泥酔。窪島とはもう三十年。会うと「やあ」と言うだけですぐ酒になる。お互い、相手の思っていることなんかわかつて、という仲の友達。

【某月某日】

原田康子さんのエッセー集「鳥のくる庭」の文庫本の解説を送つて、すぐ原田さんに誘われてススキノで飲む。そのあとカラオケを誘うと「よし、いこう」と勢い込んだ。多くの行きつけのスナックへ行き、まずぼくが「風雪流れ旅」を歌うと原田さんは迷うことなく「石狩挽歌」を選んだ。さすが小説『挽歌』の作者である。低い声での、ゆったりした、カラオケの曲の速さを無視した自分の世界を作つての情緒ある歌い方だった。何度すすめても同じ曲を歌った。少し酔うと、黒い革のスラックスと黒い靴の姿でツイストを踊った。その姿も小説を創る姿だった。

【某月某日】

博多で高校生に話したあと図書館や出版社の人たち十人ほどでの会食は河豚で、酒がすすむ。スナックに移つてのカラオケでは、若い人の曲はまったく知らない。ぼくだけ古い演歌ばかりも芸がなく思え、『ふるさと札幌』の曲があるか聞いてみる。札幌の宣伝歌で二年前にCDが発売されたが、九州では無理な気もした。ところがあつて、びっくりした。ぼくは勢いよく立つてマイクを持った。

一、星空に香る リラの花

明日を夢みて 北銀河

希望が広がる 手稲の峰は

あなたのいる街 ふるさと札幌

これは番だが歌詞は三番まである。歌い終わつて大満足であつた。博多で札幌讃歌を歌えると思っていなかった。それに、なんとつてこの曲は、ぼくが作詞したのだ。そして作曲は、あの有名な『中の島ブルース』を作曲した吉田佐である。吉田はぼくと同じ滝上出身。中学の同級生で現在、札幌の我が家のすぐ近くに住む親友なのである。編曲は西岡俊明さんである。

またこの歌を作ろうと発案し、かつ歌っている歌手が、これも我が家の近くに住む古い酒友の上田文雄である。彼は弁護士で札幌市長だったが、オペラ歌手になっても名を残したに違いないと思うほどの歌い手である。上田文雄とぼくは四十年来の友達で会うと酒になり歌になり、いっしょにブルガリアやルーマニアを旅行中も毎日、野外やホテルでワインを飲んで歌った。『ふるさと札幌』は当然ぼくらの得意曲の一つである。しかしこの歌が一番うまいのは作曲した吉田佐である。

【某月某日】

二十年かかつて書いた小説『光る大雪』が木山捷平文学賞



挿絵/中江潤一

を受け、飛行機で岡山へ。妻同行。木山捷平の小説『山陰』はぼくが好きな日本の小説の五編の一つで、二十代から五十回は読んでいたから、その作家の名のついた賞をいただくのは格別うれしかった。笠岡市長主催の祝賀会でぼくは逆上^{さか}て落ち着きを失い、急速度で酔った。選考委員の川村湊、秋山駿、三浦哲郎、講談社の高柳信子、宍戸芳夫らの前で、わけのわからない涙を流してしまった。酔っぱらった。この日の三月九日は同行の我が妻の誕生日でもあった。

【某月某日】

札幌から車で二時間の山奥にある鄙^{ひな}びた温泉宿での、苦小牧工業高校電気科・昭和三十一年卒業の同窓会に行く。卒業して五十五年たつのに八十人卒業中、四十五人も出席するからたいしたものだ。大広間で二時間飲んで喋ったあと、外の酒場へ行く。団、別の部屋で飲み直す二団、小部屋で麻雀^{マージャン}をする組に分かれ、ぼくは麻雀組に入る。メンバーの六人は毎年似た顔ぶれで、会社社長のYとK、昔、大相撲の幕内で前頭^{ひでた}の二桁まで出世したことのあるK、公民館長だったOら、それにぼくである。ゲーム中、ぼくは当然初めからビールを飲む。ほかの五人は酒を飲まない。もちろんぼくは勝つつもりでやっているの^で投げる牌^{はい}も用心するから初めは少し勝つ。だが酔ってくると安い手で上がるのがいやになり満貫^{まんかん}ばかり狙うから当然、誰かに振り込むことになる。そうすると面白くないから愚痴^{いぢ}や嫌^{いや}みを言^いってやる。「ああ、いやだいやだ。酒飲みのくせに酒も飲まずにやって、十六歳から五十五年も付き合^あってきたいせつな友達の俺からふんだくって、何が面白いんだか」と言^いってビールを飲む。するとK社長が「ああ、いやだいやだ。苦工出身の文士さんが酔っぱらって麻雀に振り込んで泣^なくなんて恥^はずかしい」と言^いい、ほかの連中が笑^わい、ぼくも笑^わう。